

底が突き抜けた」時代の歩き方 503

誰も知らない「親はなくとも子は育つ」 - 映画『誰も知らない』

映画『誰も知らない』(Nobody Knows)は、88年に実際に起こった事件をモチーフにしている。是枝裕和監督は『演出ノート』(映画パンフ所収)で、一般的にこう呼ばれている「西巣鴨子供4人置き去り事件」について次のように紹介している。

《父親の違う4人の兄妹を残し、母親は新しい恋人と暮らすためにアパートを出る。子どもたちは誰も出生届が出されておらず(つまり法律的には彼らは存在していない)学校へも行ったことがなかった。彼らは時折母から送られて来る現金書留を頼りに、アパートの一室で半年に渡って生活を続けて行く。

末妹の死が発覚して、子ども達だけのこの生活には不幸な形でピリオドが打たれるのだが、驚いたことに彼らの存在(隠れて暮らしていた3人の妹たち)をアパートの住人は誰ひとり知らなかった。つまり、彼らは社会的にも存在していなかったわけである。

事件は当初警察が妹の死を兄による折檻死と断じたこともあって、家族の絆が希薄になっている現代の都市の闇を象徴する出来事としてセンセーショナルに報道された。しかし、この少年が逮捕された当時14歳で罪に問えなかったことに加え、弁護士によって折檻死の事実そのものが否定されると、メディアの批判は母へ集中する。

「淫乱オニの母親」「地獄の子供たち」「無責任セックス」 - 週刊誌には刺激な見出しの文字が踊ったが、その一連の報道に触れながら僕の中にひとつの疑問が生まれていく。なぜ少年は妹たちを捨てて家を出てしまわなかったのだろうか?》

映画では、少年、妹、弟、妹に変わっているが、「末妹の死」までは事件とほとんど同じ概要である。実際の事件のほうは「末妹の死」の発覚によって、「子供たちだけの生活」にピリオドが打たれるが、映画ではピリオドが打たれずに、新しい家出少女が加わって「子供たちだけの生活」が続いていくように描かれている。事件をそのままなぞらずに、《なぜ少年は妹たちを捨てて家を出てしまわなかったのだろうか?》という疑問を深めていくなら、「末妹の死」という悲劇に見舞われようとも、「子供たちだけの生活」を少年も妹たちも望んでいたであろうようにして、つまり、事件によってピリオドを打たれてしまった「子供たちだけの生活」に対する彼らの望みを叶えるようにして、映画はどうしても描かれなくてはならなかった、ということだと推測される。疑問は更なる疑問を引き寄せていく。

《父に、そして母に捨てられた彼が、なぜ妹たちを捨てずに「家族」を守ろうと必死になったのか? 児童相談センターに保護された妹は「お兄ちゃんはやさしかった。お母

さんよりもいっぱいご飯を食べさせてくれた」と語っている。この一言をきっかけに僕の中に芽生えていた疑問は想像の羽根を広げていった。確かにこの不幸な事件は母親の無責任さが生んだものであることには違いない。しかし、彼女がひとりで子供を産み、曲がりなりにも育ててきたのだということも又動かしようのない事実である。彼女が出生届を出さなかった、もしくは出せなかった背景には、非嫡出子（婚外子）に対するこの国の法律や、社会に根をはっている差別の存在が大きいのではないのか？そしてこうも考える。彼女を鬼と呼ぶならば、どこかに存在しているはずの子供たちの4人の父親は何と呼ばれるべきなのか？もし母がただヒステリックに子供達に暴力を繰り返すような存在だったとしたら、長兄も同様に妹たちに接したのではないか。彼ら母子の間には少なくとも報道からはうかがい知ることの出来ないある豊かな関係が築かれていた時期もあったのではないだろうか...。》

子供は育てられてきたように育つ。殴られて育った子供は自分が親になったとき、子供を殴って育てようとする。これはなによりも事実としてそうだと見える。この悪循環を断ち切るのは、並の人間には至難の業であろう。事件後の「お兄ちゃんはやさしかった。お母さんよりもいっぱいご飯を食べさせてくれた」という妹の言葉は、妹たちにもやさしいお兄ちゃんとして少年が母親に育てられてきたことを物語っている。母親は子供たちを捨てたが、少年は妹たちを捨てたりはしない子供として育ってきたといえよう。されてきたように育つという宿命からすれば、少年も母親に倣って妹たちを捨てて家を出てもよかった。少年の意思にかかわらず、宿命を免れえないようにして大抵の場合がそうになってしまうのだ。母に捨てられた少年はしかし、母のように妹たちを捨ててなかった。それはなぜか。是枝監督は少年と妹たちとの関係に「家族」を見出した。母親の不在中に妹たちの面倒をみていた少年のなかに、妹たちの成育を支える父親のような役割が自然に生じ、妹たちのほうにも少年に頼る気持が起こり、子供同士のなかに「家族」的な関係が生じているのを感じ取ったのだ。

世間から隠れるようにして妹たちと一緒に住んでいるアパートを出て、少年に行くところはどこにもなかったであろうことも充分推測される。それに母親から捨てられたのは少年だけでなく、彼の妹たちも同様であった。一緒に捨てられた悔しさを妹たちにぶちまけることは、母親の仕打ちと全く同じであるという自省が少年のなかに芽生えなかったともいえない。少年を中心とする子供同士の生活のなかに「家族」関係が生じていたとして、はたして母親は「家族」の一員であったのだろうか、という疑問も湧き起こってくる。もし「家族」の一員であったなら、そんなに簡単に子供たちを捨てられる筈はなかったと思われる。映画の母親役のYOUのイメージがあまりにも強すぎるために、そのイメージに引きずられているのかもしれないが、母親には「家族」意識はほとんどなく、自分の生んだそれぞれ父親の異なる子供たちと同居しているぐらいの感覚ではなかったか。

少年に対しても友だち同士のような言葉遣いをする母親は、家にも母親意識が乏

しく、生活費の調達という役割を除けば、母親は居ても居なくても同じような存在であったかもしれない。母親意識が欠如していたからこそ、子供たちに辛く当たるといふ弊害を免れる一方、出生届も出さないことによって子供たちの将来を考えないという無責任さに流されていったのではなかったか。父親の異なる子供を4人も次々と生むこと自体が、母親意識よりも女性意識のほうが上回っていることを証してはいなかったか。おそらく母親が家に居つづけていたとしても、子供たちは母親から捨てられつづけていたような気がする。目にみえるかたちで母親から捨てられる日がいつかやってくるのを予感していた少年にとって最大の心配は、彼女からの生活費の滞りではなかったかと推測される。母親は自分がいつ子供たちの前から去っても生活できるように、少年をしっかりと育て上げた、つまり、十分に自らの母親意識を捨て去っていたと考えられなくもない。

子供たちは母親から捨てられる以前に、それぞれの父親からすでに捨てられてきた。母親も一緒に捨てられてきたのである。子供たちは母親と共に暮らしながら、父親から「捨てられてきたこと」を充分味わってきているにちがいがなかった。とりわけ年長者の少年は母親と身近にいて、「捨てられてきたこと」の悲哀感と解放感を同時に一身に浴びていたと思われる。母親を手助けする位置に立つことによって、母親の気持がよくわかっていたかもしれない。少年には、それぞれの父親から捨てられてきた母親が自分たち子供の前から逃げ出そうとしている気配をたえず感じ取りながら、一緒に暮らしてきたのかもしれないとも考えられる。彼女の気持がよくわかっていたが故に、母親は父親のように自分たちを捨て去ったのではなく、自分たちの前から一時的に姿を消しただけのことであり、あるときふらりと帰ってくるのだろう、という程度の受けとめかただったような気もする。母親の留守中は自分がしっかりと妹たちの面倒をよくみなければならぬ、と思っていたのではなかったか。

事件の《その後の調べで、兄は心ならずも死なせてしまった妹を山中の雑木林に埋葬し、電車に乗って何度もお墓参りに出掛けていたことが明らかになった。保護者遺棄の罪を問う裁判の法廷で母に再会した少年は彼女の期待に応えられなかった自分を責めて涙を流したそうである。この一連の事件の登場人物の中で、唯一この少年だけが、自らの責任を全うしようとした。そして、全うできずに自分を責めていた。14歳の彼だけが 》と是枝監督によって続けて記されていることが、そのことを裏付けているように考えられる。母親は子供たちを捨てたかもしれないが、少年のほうからすれば母親はあくまでも一時的に自分たちの前から姿を消しただけで、その留守中に自分は末妹を死なせるという取り返しのつかない事態を惹き起こしてしまった、という悔悟の念にとらわれつづけてきたかのような図である。

《ここまで事件を辿って来た時に、僕はこの少年がいとおしくてたまらなくなってしまうのである。甘く聞こえてしまうのは本意ではないのだが、もしそばにいたら、僕は彼の肩を抱いてあげたいと思ったのだ。「よく頑張ったね」と。「僕は君のことが好きだ

よ」と。しかし、現実にはそうすることは不可能だった。だから僕は、僕の心の中で彼をしっかりと抱きしめるためにこの映画を作ることを決意した。》

監督はここで映画作りのモチーフを語っている。少年に対するいとおしさがこみ上げてきて、《僕の心の中で彼をしっかりと抱きしめるためにこの映画を作ることを決意した》ということだが、どのように描写することが《彼をしっかりと抱きしめる》ことになるのだろうか。それは、母親から捨てられようとも、少年を中心とする子供たちの関係が自滅するには至らなかった点に焦点を絞って描写する以外にはありえないだろう。母親がいなくても子供たちだけの生活が維持しつづけられた要因はなんであったのかを、映画は追求しなくてはならない。そこで唯一明らかなことは、母親と少年を中心とする家族関係は崩壊していなかったということだ。だからこそ、母親がいなくなっても、少年を中心とする家族関係は崩壊しなかったのだといえる。《彼ら母子の間には少なくとも報道からはうかがい知ることの出来ないある豊かな関係が築かれていた時期もあったのではないだろうか》と監督は推測するが、少なくとも家族関係は崩壊していなかったということでは、そう推測することはできる。

《彼らが見ていた風景は灰色の「地獄」だけではなかったはずだ。彼らの暮らしには物質的な豊かさとは異質の、ある「豊かさ」が存在していたはずだし、兄妹たちの間での感情の共有が、喜びと哀しみが、そして彼らなりの成長と希望があったはずだ。アパートの外から「地獄」を語るのではなく、彼らがそれでも体験したはずの「豊かさ」こそを僕らは想像する必要があるのではないか。彼らが見上げた東京の空。その風景をアパートの内側から描きたいと思った。今から16年前の1988年のことである。》

この事件について書きながら、そして是枝監督の『演出ノート』をじっとみつめながら、ふたつの思いが募ってくるのが禁じられなかった。ひとつは、「親はなくとも子は育つ」のではないかという思いであり、もうひとつは社会や世間から隔離された、いいかえると、社会や世間との交渉を断ち切られた生活のなかで、子供（人間）はそれが自然な空気のようにして育てられてくるなら、社会や世間の濁りや悪とも断ち切られていることによって、むしろ良好な関係が保たれるということも起こりうるのではないか、という思いである。末妹を死なせてしまったとはいえ、事件からは子供たちだけの生活が崩壊もせず、《法廷で母に再会した少年は彼女の期待に応えられなかった自分を責めて涙を流した》ことからすれば、監督が指摘するように、少年を中心とする子供たちは生活の「豊かさ」を味わっていたにちがいないし、だとすれば、奇跡的にも思われるその「豊かさ」がどこから訪れてくるのかを凝視しないわけにはいかない。

まず、「親はなくとも子は育つ」のではないか。父親は家族にとって不可欠な存在ではありえない、ということはずでに明白になっている。父親はなるほどお金を稼いでくる重要な役割を果たしているが、その役割は父親でなければ果たせない役割ではけっしてない。事件では母親がお金を稼いでくることで、父親は居なくても不自由しなかった。

だが父親にはお金を稼いでくる役割以外に、内閉的な家族関係にむかって社会的な空気を吹き込むというもうひとつの重要な役割があるのではないかと、という問いに対しては、事件でのそれぞれの父親は母子を捨て去ることによって、あるいは母子の前から逃げ去ることによって、子どもたちに社会というものを教え込む役割から見事に撤退していた。それに出生届が出されていないために社会的に認知されていない子供たちにとって、父親から社会というものを教え込まれる前提そのものが欠如していた。

父親は居なくても家族はやっていけるが、では母親は居なくてもやっていけるか。父親も母親も居なくても、つまり、親が居なくても子供はやっていけるか、という問いになるが、もちろん、保護者がいなければ動物は生きられないように、父親であれ母親であれ、誰かが育ててくれなければ人間の子供も生きられない。末妹は幼いとはいえ、母親は曲がりなりにも12歳の長男を筆頭に4人の子供を飢え死にさせずに育ててきたのである。母親が帰らない意志で家を出たときの子供たちが、自分たちだけで生活していくことができる年齢に達していたのかどうかの判断はつかないが、ともあれ彼らは親抜きで生きていくことになった。要するに、生活費さえあれば、子供たちだけの生活も可能である一歩へと踏み出したのだ。

子供たちだけの生活が可能であったのは、彼らが社会的に認知されていない存在であったからだと考えられる。そして社会の外に在ったからこそ、子供たちは社会の悪や害毒に染まらずに、自滅することなく自分たちだけの生活を維持していくことができたにちがいない。社会の内在することは当然ながら、社会的関係の卑怯な醜さや嫌な部分も避けて通れないということである。学校に行かなければ、学校でのイジメに遭うこともないし、成績で評価されることもなかった。映画にはこのような場面がある。初めて足を踏み入れたゲームセンターで少年は同年代の子供たちと初めて友達になり、家がたまり場になって4人だけの生活が脅かされそうになるが、ある日、コンビニでの万引きを強要されて出来なかったために、友達付き合いを断たれてしまう。子供たちの悪習を共有しなければ、友達まで出来なくなってしまうのである。

「西巣鴨子供4人置き去り事件」が起きた1988年にはどのような出来事があったのか、子供にかかわる出来事を年表から拾い出すと、

3 / 8 沖縄の卒業式で初めて全校日の丸掲揚（85年までは一校もなし）

3 / 24 上海修学旅行で列車事故、高知の高校生ら27人死亡

7 / 8 東京・目黒で中2少年が両親・祖母殺し

リクルート事件と昭和天皇重体で日本国内が揺れた年であり、TVは「翼をください」「純ちゃんの応援歌」「教師びんびん物語」、CMは「きたない生き方はイカン」（鈴木清順・戸川純、TOTO）「クール宅急便でね、おばあちゃん、日本が変わるんだってよ また戦争?」「みなさん、お元気ですか?」「くうねるあそぶ」（井上陽水、日産セフィーロ）「男も妊娠すればいいんだ」（スキンレス・オカモト）、週刊誌は「アエラ」

創刊「平凡パンチ」廃刊、映画は「となりのトトロ」「AKIRA - アキラ」「ラストエンペラー」「父」「母」「TOMORROW・明日」「ベルリン・天使の詩」「フルメタル・ジャケット」「存在の耐えられない軽さ」「さようなら子供たち」「マイ・ライフ・アズ・ア・ドッグ」(パリ国際ドキュメンタリー映画祭で原一男監督「ゆきゆきて、神軍」がグランプリ)、コミックは「オバタリアン」「おぼっちゃまくん」「YAWARA!」「ジョジョの奇妙な冒険」、流行歌は「乾杯」「DAYBREAK」「Diamondハリケーン」「TATTOO」「セシル」「雪国」、本は「キッチン」「ダンス・ダンス・ダンス」「ゲームの達人」「危険な話」「狂人日記」、流行語は「DINKS」「言語明瞭、意味不明瞭」「しょうゆ顔、ソース顔」「自粛」「マスオさん現象」「今宵はここまでにいたしとうござりまする」「ペレストロイカ」「ウォーター・フロント娘(水商売一歩手前のハデな娘)」「いちご族(団塊ジュニア)」「コンビニエンス症候群」「フリー・アルバイター(フリーター)」「カイワレ族(偏差値というプラスチックケースとウレタンの苗床に植えられたカイワレの中・高生たち)」「濡れ落ち葉」「コードレスホン」「社畜」「メンズ・リブ」「カウチポテト族(自宅の寝椅子・カウチなどに横になり、ポテト・チップスをかじりながらビデオやゲームを楽しむアメリカの都市生活者に流行している生活スタイル)」「ドラクエ」「ラップ」「プーする/プータローする」

アグネス論争が起こったのもこの年である。アグネスの子連れ芸能活動に対して、林真理子が「プロ意識に欠ける甘え」と批判し、上野千鶴子が「働く女のうしろに子どもがいる」とアグネスを擁護し、「林らの正論が女性を抑圧してきた」と反論したことから、仕事と育児の両立をめぐる論争に発展した。また、ファミコンソフト「ドラゴンクエスト」が発売され、一日で百万本を完売する盛況だったが、警視庁少年1課は授業に出ずに店頭で並んだ小・中・高生など283人を補導する事態も起きた。当然のことながら、社会の内から叩き出されているあの子供たちには、東京・目黒で中2少年が両親・祖母を殺害した事件も、ドラクエ 発売騒ぎも無縁であったろうし、情報が伝わってくることもなかっただろう。彼らの生活には社会的な時間が止まっていたのである。

映画のなかで少年が学校に行きたいと言うと、母親は「お父さんがいないからイジメられるよ」とか、「学校に行ってもエライ人はたくさんいる」と、あっけらかんとしている。また、アパートのベランダで一緒に蒲団を干していた母親が「お母さん、好きな人がいるの」と言って、少年を困惑させるシーンもあったり、母親が子供たちを置き去りにする前に、「お母さんが幸せになってはいけないの」と少年に吐くシーンもあった。お前もその年頃になると、お母さんの気持ちがわかるよね、といった口調であり、これらの場面に「親の心、子知らず」とは逆の、「子の心、親知らず」ともいえる、母親の心を知ってしまった少年のやるせなさがあった。正直に打ち明けた母親の心を受けとめようとする気持ちと、母親に出て行かれると自分たちはこれからどうやって生活すればいいのかという不安とがせめぎあうなかで、少年が途方に暮れていたことは間違いなかった。

いうまでもなく以上の母親の台詞は事件の母親と重なり合うものではなく、フィクションであろう。末妹を心ならずも死なせてしまった責任をひとりで背負って涙を流す少年の心情に踏み込むために設定されたシーンであったと思われる。母親の心を知った少年は、彼女から妹たちの面倒まで託されているように感じてしまったのだ。家を出た母親は自分たちを捨てたわけではなく、いつか帰ってくるだろうという期待まで母親の心に読み取ってしまったのである。だから法廷で母親に再会した少年は、彼女に詫びて涙を流さざるをえなかった。監督はそう考えたのである。このけなげな少年の哀れな心を解き放ってやらなければならないと決意して、監督は映画を作ったのだ。《僕の心の中で彼をしっかりと抱きしめ》てあげようとするのは、少年が背負い込んだ重荷から彼を解放してやろうとすることであった。

事件のなかの少年はおそらく母親を待ちつづけていた。帰ってくると思っていたのだ。もしそう思っていたなら、少年は母親の留守を預かる役割を引き受けたことになる。末妹を死なせてしまったことによる負い目は、その役割からやってくるから、彼をそんな辛い立場に追い込まないためには、まずその役割から解放してやる必要があった。つまり、母親から自分たちは捨てられたことをはっきりと自覚しなければならなかった。映画はまずそのことを明白に知らしめる場面を設定する。生活費が底をついた少年が窮して母親の居る家に電話をかけると、別名を名乗る彼女の声が聞こえてきたために無言で電話を切ってしまう。自分たちの母親はもういなくなったことを覚る決定的な瞬間だ。そこからもはや誰も頼らず、自分たちだけの力で生きていこうとする4人の新たな生活が始まっていく。彼らの密室状態の生活が否応なしに外部の世界にむかってじょじょに開かれていくプロセスで、最も幼くて弱い末妹にその影響が大きく申し掛かるようにして、死が覆い被さるのだ。

母親と4人の子供が引っ越してきたとき、大家には父親が海外赴任中で自分と少年だけの2人暮らしだと嘘をついていたために、下の2人の子供はトランクに押し込まれて部屋に運ばれ、長女は誰も見られないように階段を駆け上がって部屋に入り込む。長男の少年だけが姿を見られても構わない存在で、あとの3人は「いない存在」だったので、母親は「大きな声で騒がない」「ベランダや外に出ない」とたえず言い聞かせていた。トランクから出た幼い子供たちは部屋というトランクに依然として押し込まれたままの不自由な日々を強要されていたので、母親がいなくなって子供たちだけの生活が始まると、窮屈な生活から抜け出してベランダに近づき、外出の機会も増えていく。少年にも友達が出来て外部との交渉が広がる一方で、母親が残してくれた生活費では光熱水費すら払えない状態のなかで、長女がピアノ購入のために貯めていたおこづかいを差し出すなどして、子供たち4人の絆も深まっていく。

少年は生活費を得るためにタクシー会社で働いている末妹の父親を訪れたり、知り合いのパチンコ屋の店員からお金を借りたり、親しくなったコンビニ店員から賞味期限切

れの弁当や食べ物を貰ったりするなど、奮闘するなかで電気も水道も止められるが、公園の水道で洗濯をし、ペットボトルに水を入れて持ち帰る。部屋では長女が玩具のピアノを弾き、少年がカレーを作ったり、カップ麺の残り汁にごはんを入れておいしそうに食べたりする。夜、みんなでひそかに町に買い物に出かけたり、彼らだけの細やかだが「いっぱい」の楽しさを大きく吸い込んでいる。雨が上がった翌日に、まるでピクニックでも行くかのようにして、4人が揃って外に出かける場面がある。コンビニでは嬉しそうにそれぞれが好きな物を買ひ、公園で遊び、帰り道で見つけたビルの谷間の空き地で花の種を大事そうに摘む。部屋に戻ると早速ヌードルの空カップにその種を植え、4人は花の成長を毎日楽しみに見守る。

母親の厳格な規制から解放された子供たちが外に一步出ると、多くの色んな珍しいモノに出会って嬉嬉としている様子がそこに描写されているのだ。誰も振り向きもせず踏み付けていくただの雑草さえも、この「社会的に存在しない」子供たちの目には、かけがえのないものとして美しく映っていたのだ。子供たちがその種を摘んでいる雑草が、彼ら自身であることは間違いない。花壇に手入れされてきちんと整列させられている、認知された百花と異なって、雑草は花壇の外の道端やコンクリートの裂け目に目立つことなく咲いている。社会的に認知されていないという点では、子供たちも雑草と変わらない。彼らは全く意識することなく、誰も気に留めない雑草を目にして、その花の種を摘んで植えて育てようとしたとき、凶らずも自分たちの成長と重ね合わせていたのだ。

この場面にはもっと重要なことが暗示されているように思われる。はじめて見る世界はなんと新鮮で、「かけがえのないもの」として生き生きとすべてが目に入ってくるか、ということだ。余命いくばくもない末期の病に冒された者の目に映るのと同じ世界の「かけがえのなさ」が、子供たちの目に映しだされているとあってよい。誰もが驚いて目を見張る別世界が「かけがえのない」世界として新鮮に映るのではなく、部屋の中にじっと閉じ込められていた子供たちが初めて外出したとき、なんの変哲もないこの日常世界が彼らには冒険心でワクワクする、スリルに満ちた世界に映っていたということが肝心なのである。出生届も出されていない彼らの存在を「誰も知らない」ように、見慣れた風景が「誰も知らない」風景として押し迫ってくるように見えることがありうるし、そのとき「誰も知らない」存在として生きていることの「かけがえのなさ」に恵まれているにちがいない。

子供たちが外部に出かけるようになると、どうしても若い末妹が部屋で一人取り残されてしまう。少年や上の姉や兄が遊びに出かけているとき、彼女はベランダに出て、大事に育てている花に水をやるために台の上に乗ってバランスを崩し、路上に落下して死ぬ。実際の事件での末妹の死がどのようなものであったのかは知らないが、映画ではあくまでも事故死として描かれており、そこに末妹の死に対する責任から少年を免除する意図が窺われる。末妹の死の発覚は少年による警察への通報であったのか、それともそ

れを機に子供たちだけの生活が崩壊していくことによって、外部の目に触れることになったのか、わからないが、映画では子供たちだけの生活を崩壊させないために、少年だけに負い目を抱かせないように描き、したがって、警察への通報や福祉事務所などの公的な機関に頼るようなことも当然起こらない。それは別に大人社会への拒絶の態度でもなければ、抗議の姿勢でもなく、外部社会と接触することなく維持されている子供たちだけの生活からすれば、極めて自然な態度なのだ。『演出ノート』の最後はこう記されている。

《「西巣鴨事件」の兄は、亡くなった妹をトランクに詰め、友人とふたりで西武池袋線の特急レッドアロー号に乗って終点の西武秩父駅に降り立つ。トランクを転がして改札を抜け、坂道を登り、羊山公園内の雑木林に穴を掘り妹を埋めた。何故秩父だったのか？

この少年の実父が秩父のセメント工場で働いていたことがあったと言われていて、それが、この場所が お墓 として選ばれた理由だったのではないかと考えられた。しかし、そこはあくまで少年の父が働いていた場所であって、末妹の父ではない。なのになぜ彼は、この場所に妹を埋めたのか？ それがわからなかった。わからなかったが故に惹かれた。その結末に対する疑問から逆算して、僕は彼らの過ごしたであろう日常のディテールをフィクションによって積み重ねてみた。その結果、彼が埋めたのは本当に妹だったのだろうか？ という抽象的な問いが浮上して来た。彼はその父の山に、いったい何を封印したのだろうか？

映画の結末は、実際の事件とは当然ながら違う。実際には春、少年に友達が出来て、それまで閉鎖的でありながらもある安定を獲得していたユートピアが、外部からの侵入者によって破られ、内部崩壊してしまう。しかし、映画はあえて その先 を描こうとした。その1度目の危機を偶然乗り越えた先に起こる不可避の喪失と、さらにその先にある、これも決して甘いつもりはない「可能性」について。僕がみつめたかったのは、その「可能性」の中にある それでも生きていくであろうたくましさ、生きられてしまいうらさ、不幸とは呼びたくない現実だったと思う。こうして その先 を描くことで、僕は彼が埋めたものが何だったのかを…僕なりにより深く考えようとした。今もそのことを考え続けている。明のサンダルの音が今も僕の頭の中で響いているように 》

少年が埋めたものが何だったのか、という問いの前に立ちつづけるために、映画でも実際の事件どおりに末妹の遺体を少年の父親が働いていた場所に埋める。ただし映画では、父親の働いていたところが羽田空港の設定になっていたのも、友人の中学生の少女と2人で空港周辺の空き地に埋葬する。引っ越しの度にトランクの中に入れられて運ばれていた末妹は、死後も棺桶として同じトランクの中に入れられて、雑草の花の種のように土中に埋められる。同行する少女は学校で葬式を出されるなどのイジメを受けて不登校になり、4人の子供が洗濯や水汲みなどでよく出かける公園で知り合ったのだ。どこにも行き場所のない彼女は子供たちの家に遊びに来るようになって、しだいに打ち解

けていく。ある日、子供たちの窮状を知った彼女は彼らを助けるために、援交で得たお金を少年に渡そうとするが、少年はそのお金を受け取らずに彼女の前から走り去ってしまう。

そんな少女が少年に同行して、末妹の遺体を埋める行為は「身代わり」の象徴的な儀式を暗示しているようで、現に映画では少女を含む新しい4人で子供たちだけの生活がつづけられていくことが予感されて終わる。外部から新しく加わる少女は、末妹の死によって内部崩壊に晒されている、それまでの子供たちだけの生活の欠損状態を外部の存在によって埋める役割を意味していた。3人の子供たちは自分たちが生きつづけるためには、外部社会で生きてきた少女の力を必要としていたし、学校にも家庭にも居場所がなくなってしまった彼女もまた、生きていくためには「誰も知らない」世界で存在している彼らのような場所を必要としていたのだ。つまり、「誰も知らない」世界は、「誰も知らない」ところで生きていと苦しんでいる社会の住人を受け入れることによって、新たな再生を図っていくことが示唆されていたのである。

《彼はその父の山に、いったい何を封印したのだろうか?》と、監督が考え込んでいる問いに対して、評論家の佐藤健志は「さよなら日本の子供たち 少子化と対米コンプレックス」(「正論」17・2)で、次のように論じる。

《この疑問を解くうえでのポイントは、ゆきは埋められる時のみならず、アパートにやってきたときにもスーツケースに入れられていたことである。しかも入居の場面の前には、物語全体のプロローグとして、明と紗希が埋葬のためにモノレールに乗る場面が挿入されていたため、映画の文脈において、ゆきは最初から死んでいたことになる。なるほど出生届が存在しない以上、彼女はもともと生まれていないのであり、「生者」より「死者」に近い存在といえる。

けれども出生届がないのは残り3人も同じなので、これは福島家の子供がそろって死者であることを意味する。現に次男の茂も、スーツケースに隠れてアパートにやってきたのだ。また劇中、子供たちはカップラーメンの容器にめいめい土を詰め、花の種子をまいて育てようとするが、ゆきが本当に「土に還った」ことを思えば、彼らは自分たち自身を(象徴的に)生み落とそうとしていたのだろう。ベランダに並んだ容器の脇に、骸骨の人形がさりげなく置かれていたのは、こう考えるとじつに意味深長であった。

明が弟や妹を捨てず、「家族」を守ろうとけんめいになったのも、外に広がる「生者の世界」にはどのみち居場所がないと悟っていたからではあるまいか。だとすればゆきの埋葬は、自分が「生ける死者」にすぎないこと(=死んでいようと生きねばならないこと)の確認としての性格を帯びる。彼が地中に埋めたのはおのれ自身にほかならず、ゆえに自分の父が働いていた場所が「墓」に選ばれたのだ。自己を「生ける死者」と規定するのは、親から子へと受け継がれる生命の連鎖をみずからの手で断ち切ることにひとしいのである。これを裏づけるかのごとく、埋葬場面で流れる挿入歌「宝石」(タテタカコ作詞・作曲)は、「氷のように枯れた瞳で僕は大きくなっていく/誰も寄せつけ

られない 異臭を放った宝石」と歌った。

とはいえ看過しえないのは、両親に捨てられてもおらず、戸籍や国籍も持っているはずの紗希までが、級友に葬式を出されただけで、明たちの世界に入りこんでしまうことであろう。『誰も知らない』には、「欧米化・白人化志向の結果、日本の子供は全体として『生きていること』と『死んでいること』の境界が曖昧になっており、誰もが潜在的には死者なのだ」とする洞察がこめられている。同作品のスローガンが「生きているのは、おとなだけですか」なるものだったのも、けだし当然と評さねばなるまい。》

出生届が出されていないからといって、子供たちが「死者」であるわけではない。出生届はあくまでも手続きの問題であって、子供たちがこの世に生みだされてきている事実を引っくり返せるものではない。出生届があるうとなかろうと、彼らが生まれて存在していることをまず確認しておかなくてはならない。路傍の雑草が多くの人に草花とみなされていないなくとも、それらが小さな花を咲かせているのと同じである。それぞれの父親たちが母子を捨て去ったのも、母親の手で出生届が出されなかったのも、母親が子供たちを置き去りにしたのも、すべて大人の都合であり、大人の世界の論理にほかならなかった。末妹の死は大人から捨てられた拳句の出来事にほかならなかったから、少年が末妹の死にまだ生きている自分たちの死を覗き込むのは当然であった。実際の事件では末妹の死に対する責任を少年一人が被っていたが、映画では大人から捨てられたために起こった悲劇として明確に押さえられていた。

少年が末妹の死を自分たちの死として捉えたとき、彼の心中に初めて自分たちを捨て去った大人の世界を彼のほうから捨て去ろうとする決意が芽生えてきたにちがいない。末妹の遺体の埋葬場所は彼の決意が掘り起こせるところであれば、どこでもよかった。つまり、死んだ末妹と共に自分が生きていく決意を示すために、これまでの自分を含む子供たちを埋葬するのにふさわしい場所であれば、どこでもよかった。おそらくそのようにして映画では少年の父親が働いていた羽田空港が選ばれたし、事件では秩父の山中が選ばれた。羽田空港が選ばれたもう一つの要因として、少年が末妹の誕生日に「いつかモノレールに乗って飛行機見に行こうね」と約束していたこともあった。コンビニでありったけのアポロチョコを買って、トランクに入った末妹を連れて遠足のようにして羽田空港に向かったのである。

同行した少女もまた、佐藤氏の言辞とは異なって、戸籍や国籍があっても、両親から実際には捨てられていないようにみえても、そこでは生きられないと思いつづけることによって、この社会から捨て去られている存在であった。したがって、彼女が少年と共に末妹の埋葬に加わったとき、彼女自身の埋葬も行っていたといわざるをえない。末妹の埋葬と共に少年は自分を地中に埋め、少女は自分を地中に埋め、そして大人の社会も地中に埋めて、新たな子供たちだけの「家族」として生きていくことを囁みしめていたのである。

2005年9月19日記

